

## 吉田松陰自賛肖像

(全集第九巻収載：東行前日記：543頁)

有名な松陰の肖像画が描かれた掛け軸である。松陰と云えば、この貌を思い浮かべる人が多いだろう。

安政六年（1859）五月、松陰に江戸送りの命令が下された。門下生「久坂玄瑞」の発議によって松浦松洞によって松陰の肖像を描かせたものに、松陰自身が「賛」を書いた。

現在七枚が残されている。最初の保持（贈り先宛名あり）した家に因んで①吉田家本②杉家本③品川家本④岡部家本⑤中谷家本⑥久坂家本⑦福川家は賛のみで跋なし。が描かれた。（中谷家本の「跋」に予人の為に此の賛を書す。凡そ七通。今すでに之れを厭う。賓卿（中谷正亮）復たもって見んことを迫る。嗚呼、賓卿我れにおいて最旧（の友）なり。それ辞すべけんや。將に之れを發せんとするの前夕（五月二十四日二十一回猛士寅書）と書かれているので、それがわかる。）因みに最初に書いた吉田家本が五月十六日であるから、九日かけて書いたことになる。

原文を下記する。

十六日 朝、肖像の自賛を創る。像は松洞の寫す所、これに賛するは士毅（小田村伊之助・松陰の妹婿）の言に従ふなり。

三分 廬を出づ、諸葛 已んぬるかな、  
一身 洛に入る、賈彪 安くに在りや。  
心は貫高を師とするも、而も素より立つる名無く、  
志は魯連を仰ぐも、遂に難を積くの才に乏し。  
読書 功無し、 朴學三十年、  
滅賊 計を失す、 猛氣二十一回。  
人は狂頑と譏り、 郷党 衆く容れず、  
見は家國に許し、死生 吾久しく齊うせり。  
至誠にして動かざるは、古より未だ之れ有らず、  
古人 及び難きも、聖賢 敢へて追陪せん。

これを解釈すると、

天下三分の計を図り草廬から出仕したという、諸葛孔明はもはやこの世に無く、  
党禁を訴えるため、一身で都に入ったという、あの賈彪は何処にいるというのか。  
私の心はあの壮士の貫高を師としているが、元來世間に立てる程の名声は無く、

私の志は齊の魯仲連を尊敬しているが、結局は難事を解決する才に乏しい。  
読書もその効果がなく、学問に従って三十年になりながら、  
外夷を滅ぼそうとの企ても失敗した。一 勇猛心を二十一回振り起そうとしたのに。  
世の人は私を頑固者と非難して、邑人は多く私を受け容れてくれないが、  
吾が命は國家に捧げており、死ぬにしろ、生きるにしろ忠誠を尽くす心にかわりはない。  
至誠を尽くせば心を動かさない者は、古来一人もいないと、孟子は言ったが  
諸葛孔明などの俊傑ほどには及ばないまでも、聖賢が求めたものを精一杯追慕したい。

以上が「贊」といわれるもので、画に題して画面中に書く詩・歌・文を云うが、自分で書いたので「自贊」となるのである。(以上、吉田松陰撰集より抜粋)

有名なこの松陰の画像の上に書かれている文であるが、この「贊」のほかに「跋」が書かれている。これは、贈る人物を想定した文言で、松陰の自贊画像には右側に「贊」が書かれ、七通ともほぼ同文である。しかし、「跋」は上記のように、個人的な「贈り言葉」が書かれているので、それぞれ文が異なるのである。

[吉田松陰の名文・手紙を読む【目次】](#) [ページへ戻る](#)

[吉田松陰.com](#) [トップページへ](#)